

看護専門学校3年生を対象としたワールドカフェの 実践とテキストマイニングによる分析

白井 聡美¹⁾, 岩村 徳子²⁾, 鷺塚 寛子³⁾, 岡本 恵里³⁾

1) 元富山県立大学看護学部 非常勤講師

2) 富山赤十字病院

3) 富山県立大学看護学部

要 旨

社会人基礎力の一つ「前に踏み出す力：主体性・働きかけ力・実行力」を高めることを目指し、ホームルームでのワールドカフェを通してA看護専門学校3年生を支援した。統合実習前後、看護師国家試験後の3回のプログラムを作成し、各回終了後に提出された17名の個人ワークレポートをテキストマイニングにより分析した。第1回の頻出語は「自分・意見・考える・行動」であり、自己課題を認識したうえで主体的に行動するための方策を挙げていた。第3回の頻出語は「自分・看護・患者・考える」であり、患者や先輩看護師などの周囲に働きかけることに意識が向く内容を挙げていた。ワールドカフェという自由な雰囲気の中で結論を急がず意見を出し合う方法は、他者との交流により自分について考える機会を生むことに繋がり、自己理解が高まった可能性がある。それは自分が取り組むべき具体的な目標を掲げて行動変容を目指そうとする文脈として表現されていた。

キーワード

看護基礎教育, 社会人基礎力, 教育プログラム, ホームルーム

はじめに

厚生労働省は社会のニーズに応じて看護基礎教育の改正を重ねてきたが、追加すべき教育内容も多く3年間の修業年限では組み込むことが難しい現状にあり、各教育機関には教育方法の工夫が求められている。中部地方にある3年課程の看護専門学校（以降、A看護専門学校とする）では、学習支援、生活指導、就職や進学支援等を担う専任教員のアドバイザー2名を各学年に置き、クラス運営を担ってきた。201X年4月、アドバイザーは3年生全員（29名）にA看護専門学校の教育理念に基づく5つの教育目標、18の到達目標を踏まえた、1年間の自身の行動目標を立案してもらった。さらに、10月と翌年2月に達成度自己

評価（A～Dの4段階評価と自由記述）をしてもらうことで、以降の自己課題を明確にできるよう計画した。

10月の達成度自己評価の自由記述欄には、周囲の者から改善した方がよいと指摘されたことについて自分を否定されたと認識してしまうことや、事実が考察されず抽象的な評価内容が散見された。アドバイザー以外の教員からも、3年生は授業後に学習した内容や感想を記述することはできるが、授業時間中の教員からの質問に対する返答や実習カンファレンスでは、場面や状況を察して発言を控えて他人に任せてしまうと報告を受けた。また、提出期限のある課題などは計画的に進められない傾向があることが指摘された。このことから、困難なことや自己課題に主体的に向き合

える力を高めることが教育課題であった。

2006年に経済産業省が、職場や地域社会の中で多くの人々と接触しながら仕事をしていくためには「社会人基礎力（3つの能力／12の能力要素）」が必要であることを発信して以降、企業・学校等において社会人基礎力を育成する取組が進んでいる¹⁾。看護職としての社会人基礎力に関する著書もある箕浦らは、現在の若者らが職場や地域社会で問題があると指摘を受けるタイプを、①指示されるまで自ら何もしようとしない指示待ち人間、②マニュアルに依存して自分の頭で考えようとしないマニュアル人間、③自分勝手に同僚と強調する姿勢に欠ける一匹狼、の3つを挙げている¹⁾。

A看護専門学校の3年生の現状もこれらのタイプに当てはまる部分があることから、「社会人基礎力」の3つの能力の一つである「前に踏み出す力（アクション）：主体性・働きかけ力・実行力」に着目し、主体的に課題を解決する力、内に秘めずに他人に働きかけ巻き込む力を高めるための教育的支援が必要であると考えた。しかし、卒業まで半年を切った段階であることから、教科外活動であるホームルームを活用して実施できる方法を検討した結果、報告者の一人が学外研修で経験した“ワールドカフェ”が候補に挙がり、導入の可能性について検討した。

ワールドカフェはホールシステム・アプローチのひとつであり、1980年代から90年代半ばにかけてアメリカで開発された。組織や企業における組織づくりやチームビルディング、行政や福祉での多様な団体や地域住民との関係づくりや地域づくり、教育では、アクティブラーニングとして実践・活用されている²⁾。カフェのように飲食しながらリラックスした雰囲気の中でテーマに集中した対話ができ、話し合いを続けることで、あたかも参加者全員が話し合っているような一体感が得られることが特徴である²⁾。参加者が少人数に分かれたテーブルで自由に対話を行い、ときどき他のテーブルとメンバーをシャッフルしながら話し合いを発展させていくこの方法は、方向性や答えを主導するファシリテーターが不要であり²⁾、アドバイザー2名で企画・運営し、かつ教室で行う

ホームルームにも適している。また、グループワークやワークショップのような議論や問題解決を目指す話し合いではなく、対話を繰り返すことで生まれる気づきや理解の深まりを共有することを目的とし、学生主体の対話により気づきや理解の深まりが共有できることを通して、自己理解や他者理解の機会になることを期待した。

実施に向けたプログラムを計画した時点では、看護基礎教育における“ワールドカフェ”実践報告は見当たらなかったが、2011年に医学部1年生には医療倫理の授業、4年生には病棟臨床実習前の授業に、言語情報や知的技能ではなく態度教育として“ワールドカフェ”を実施した報告がある³⁾。その報告において、最終回の授業後に実施したアンケート調査（7段階のリッカート法）では、設問「今後活かせる意見交換ができたか」の平均は、1年生4.9、4年生5.3で有意差を認めた（ $p < 0.01$ ）。自由記述では、1年生からは「答えない事に対する疑問」の声が出ていたが、4年生からは「実習後に行うことで違う意見が出そう、1年生のころから経験しておきたかった」等が出されている。医学生を対象としたワールドカフェの成果では、ワールドカフェは学生の知識や経験が増える高学年に向いている方法と言える。看護師を対象とした実践報告では、がん看護実践者育成プログラムの一環として、地域の看護職との交流を目的に3年間に2回のワールドカフェを開催していた⁴⁾。その報告では、化学療法を受ける患者の看護や患者の暮らしを支えるケアについて、参加者延べ66名が普段思っていることを1グループ4～6人で語り合う時間を設けている。実施後のアンケートに書かれた感想では、自分の看護を振り返ると共に、新しい看護を発見する機会となっていることが示されている。

これらのことから、看護基礎教育においても臨地実習での経験を有する3年生の段階でワールドカフェを実施することで、対話による気づきや理解を深めることが期待できると考え、卒業前の3年生を支援した。ワールドカフェのプログラムおよび初回（第1回）と最終回（第3回）の個人ワーク記載内容を比較した結果について報告する。

実践方法

1. “ワールドカフェ”の参加者

中部地方のA看護専門学校（3年課程）に在籍する3年生全員（29名）。

2. “ワールドカフェ”の実施期間

201X年11月～201X+1年2月

3. 3年生の単位修得状況

ワールドカフェ開始時には、卒業に必要な119単位のうち、基礎分野、専門基礎分野、専門分野Ⅰ、専門分野Ⅱ、統合分野（在宅看護論）の計115単位を取得し、統合実習を含む計3科目4単位を残していた。

4. “ワールドカフェ”のプログラム立案（表1）

ワールドカフェを用いた研修を受講した報告者1名が主体となり、ワールドカフェの書籍*を参考に報告者でプログラムを検討した。実施時期については、講義や実習および看護師国家試験に向けての学習に影響がないよう、3年間の実習の総まとめの位置づけである統合実習前後および国家試験後から卒業式前までの計3回とし、ホームルームの時間を充てた。

各回の目標は、場面や状況を察して発言を控えてしまうという3年生の傾向を踏まえて定めた。また、香取ら²⁾が推奨するワールドカフェでの主催者の役割を参考に、全体の進行と時間管理は教員としたが、ファシリテートやコメントはしない方法とした。また、カードづくりでは、会話の活性化を図りながら対話のプロセスを客観視できることを重視しKJ法を活用した。

グループ編成は、グループワークが活性化するとされる5～6人を参考に⁵⁾、対象学生29名を学籍番号順に4～5人×6グループで構成した。グループ訪問については、メンバーをシャッフルしながら話し合いを発展させるため、自分のチームに残る学生は1名とし、その学生は毎回変更する方法とした。グループ訪問で得られた意見やアイデアをグループで共有する時間を10分設け、その後すぐに提示したテーマに関して自分自身と

向き合い考えや行動について見つめ直し、A4用紙1枚にまとめる個人ワークの時間を確保した。リラックスするための飲食物については、第1回はクラス会費から約3,000円支出し、第2回以降は学生が自由に好きなものを持ち寄った。

3回に分けて実施したワールドカフェの目的達成度や得られた学び等を把握するため、第3回終了後に独自に作成した自由記述の無記名自記式アンケートを実施した。内容は「各回の目標は達成できたか、どのような気持ちで各回取り組んだか、第3回を終了した時点の自身および他者（クラス、患者、チーム、学校、組織など）に関する気づき、現段階の行動目標、ワールドカフェの感想」とした。

* 参考図書

- ・香取一昭，大川恒：ワールド・カフェをやろう！ 会話がつながり世界がつながる，日本経済新聞出版社，東京，2009。（引用文献2）
- ・アニータ・ブラウン&デイビッド・アイザックス：ワールド・カフェ カフェ的会話が未来を創る。HUMAN VALUE，東京，2007。
- ・堤明純，石竹達也，的場恒孝：小グループ学習における適切なグループ構成人数。医学教育，31（2）：71-75，2000。

5. 分析方法

個人ワークで提出された、第1回「統合実習に向けた自己課題に対する具体的な行動」と第3回「今後の自己課題に対する具体的な行動」の記載内容を電子テキスト化し、テキストマイニングソフトのKH-Coder Official Package Starting Edition (ver.3.Beta08e) 無料版を使用し分析した。

- 1) 「前処理の実行*1」から得られた、各回の「総抽出語数*2」，「分析対象抽出語数」および「異なり語数*3」「分析対象異なり語数」，「文章数」を確認した。
- 2) その上で抽出語リストを確認し，頻出語リストを求めた。
- 3) 「共起ネットワーク*4」により，抽出語の出現数および，抽出語と抽出語の共起の程度を求めた。「集計単位と抽出語の選択」の項にある「出現数による語の取捨選択」は最小出

表1 ワールドカフェの概要

回：月日	第1回：11月22日	第2回：12月22日	第3回：2月23日
時期	統合実習前	統合実習後	看護師国家試験後・卒業前
目標	1. クラスの長所と課題を明らかにする 2. 長所と課題に対する具体的な行動目標を立てる	1. 第1回の行動目標を評価し、残された課題を明らかにする	1. 専門職業人となる自己の育て方を明らかにする 2. 3年間共に学んだクラスメイトとのつながりを再確認する
	統合実習：11月28日～12月13日		
実施時間	合計195分	合計135分	合計200分
	(10分)	(5分)	(10分)
オリエンテーション	・ワールドカフェとは ・KJ法とは ・テーマについて ・タイムスケジュール	・テーマについて ・タイムスケジュール	・テーマについて ・タイムスケジュール
準備	(5分) ・1回目はチーム名を決定（3回とも同じグループ・チーム名で実施） ・メンバー同士であいさつ ・自分のチームに残る学生の決定（毎回変更する）		
	計80分	計45分	計90分
KJ法	(20分) ・3年生の「良いところ」「悪いところ」 ・12月までに「改善したいこと」「もっと伸ばしたいところ」	(10分) ・統合実習後に「見えてきたこと」「取り組むこと」 (前日12月21日にテーマについて学生に周知し、事前準備を促した)	(30分) ・「当面の目標」 ・「大事にしたいこと」など、専門職と言われる看護師になるために取り組むこと
	付箋は内容別に色を変え、模造紙上に貼付する		
図式化	(60分) ・模造紙上で付箋の色別・内容別にまとまりをつくりネーミング ・関連性を考え図式化	(35分)	(60分)
発表準備	(10分)		
休憩	(10分)		
	50分：各テーブル8分	40分：各テーブル6分	40分：各テーブル6分
グループ訪問	・自分のチームに学生1名を残し、他の学生はグループで各テーブルを順に訪問 ・自分のチームに残った学生は、模造紙を用いて訪問グループに内容を説明 ・訪問グループは、意見および自分のチームのアイデアを伝える ・自分のチームに残った学生は、訪問グループから得た意見やアイデアを異なる色の付箋に書き、模造紙に追加する		
意見やアイデアの共有	(10分) ・自分のチームに戻り、チームに残った学生と訪問した学生で情報交換を行い、新たな情報を付箋に書いて模造紙に追加する		
個人ワーク	(20分) 「統合実習に向けた自己課題」に対する具体的な行動	(10分) 「卒業時の自分に宛てた手紙」(卒業式後に自宅郵送)	(20分) 「今後の自己課題に対する具体的な行動」
	A4用紙1枚に自由記載（自記式・文字数制限なし）		
アンケート	実施せず	実施せず	(15分) 無記名自記式（8項目）

現数を4,「共起ネットワークの設定」の項にある「描画する共起関係の選択」は上位60とした。出現数の多い語ほど大きい円で、強い共起関係ほど太い線で描出されるように設定した。

- 4) 各回の特徴は、共起ネットワークの媒介中心性*5で把握できる中心性の強い語を中心に、サブグラフ検出*6の共起関係から検討した。
- 5) 特徴を確認した上で、KWIC コンコーダンス*7を用いて対象者の記載内容を確認し、語句間のつながりや文脈の意味が大きく変わらないことを意識しながらカテゴリー化した。共起した語の中で、語句間のつながりが見えづらく、カテゴリー名に入りにくい語は、KWIC コンコーダンスで文脈を確認した。1人の学生が該当する語を繰り返し使用していることで頻出語になる場合や、共起関係を強くしている場合は、カテゴリー名の語句として使用することを控えた。
- 6) 分析過程では、テキストマイニングに精通した大学教員からスーパーバイズを受けることにより、解釈の妥当性を高めた。

- *1: 電子テキストデータの文章から語を切り出した結果がデータベースとして整理される⁶⁾
- *2: 分析対象ファイルに含まれるすべての語の延べ数⁶⁾
- *3: 何種類の語が含まれているかを示す数⁶⁾
- *4: 出現パターンの似通った抽出語、すなわち共起の程度が強い、抽出語を線で結んだネットワーク図⁶⁾
- *5: 各語がネットワークの中でどの程度中心的な役割を果たすかを示す⁶⁾

*6: 比較的強く互いに結びついている部分を自動検出し、グループごとに色分けして示す⁶⁾

*7: 分析対象ファイル内で抽出語がどのように用いられているか文脈を探ることができる⁶⁾

6. 倫理的配慮

対象となる3年生が卒業した年(201X+1年)の12月に、在学中に実施したワールドカフェに関するデータを分析することの説明書と同意書、返信用の封筒を29名全員の自宅に郵送した。説明書には、ホームルームとして実施したワールドカフェで提出された記録物が分析対象となる旨の目的と方法について記載した。参加は自由意思であり、プライバシーの保護に十分配慮し、記録物の氏名やチーム名は個人が特定できないよう記号に置き換え、施錠できる保管庫で管理すること、卒業生の支援事業を受ける権利に影響はないこと、データは目的以外には使用しないことを記載した。同意書の返送をもって参加の同意が得られたものとした。本報告は、A看護専門学校倫理委員会の承認(201X+1年度 承認番号1)を得て実施した。

結 果

ワールドカフェに参加した3年生29名のうち、参加の同意が得られたのは17名(58.6%)であり、17名全員の第1回と第3回の個人ワーク記載内容を分析対象とした。

1. テキストデータ

データベースを表2に示す。第1回「統合実習

表2 テキストデータのデータベース(第1回・第3回)

項目	総抽出語数	分析対象抽出語数	異なり語数	分析対象異なり語数	文章数
第1回	2469	1141	536	422	124
第3回	2902	1307	598	470	184

に向けた自己課題に対する具体的な行動」の総抽出語数は2,469語、分析対象抽出語数は1,141語であり、異なり語数は536語、分析対象異なり語数は422語、文章数は124であった。

第3回「今後の自己課題に対する具体的な行動」

の総抽出語数は2,902語、分析対象抽出語数は1,307語、異なり語数は598語、分析対象異なり語数は470語、文章数は184だった。

各回の頻出語上位5位の抽出語、抽出語数、記述内容（抜粋）を表3に示す。両回で共通する語

表3 抽出語と記述内容（第1回・第3回）

回	順位	抽出語	抽出語数	記述内容（抜粋）	記述内容の下線は報告者が追加
第1回	1	自分	44	- 誰かがやってくれるだろうと思うのではなく、<u>自分</u>がやる、協力してやる <u>自分の</u>意見を少しでも表出できるようにしたい <u>自分を</u>勉強せざるを得ない環境に置く <u>自分を</u>管理して時間や資源を無駄にしないように行動する	
	2	勉強	21	- 国家試験まで残り少ないことを自覚し、毎日<u>勉強</u>する - お互いの<u>勉強</u>方法で良いところは取り入れ、高め合う <u>勉強</u>する時と遊ぶときのメリハリをつける	
	3	意見	19	- 場の空気に流されず、他者の<u>意見</u>を聞いた上で自分の<u>意見</u>を伝える - 自分の<u>意見</u>を持つ、話し合いにおいて自分の<u>意見</u>を必ず話す、授業で反応するように心がける	
	4	考える	18	- 自分のダメなところ、できていないところを隠さずに受け止め、どう改善したらよいか<u>考える</u> - 相手側の思いや立場になって考える、相手の言動の意味や意図を<u>考えて</u>みる - まあいいやをやめて、どうするか具体的に<u>考える</u>	
	5	行動	15	- 物事の優先順位を考え、<u>行動</u>する、人任せにしないで積極的に先を見据えながら<u>行動</u>する - 人の意見を聞いたとき、うのみにするのではなく自分で考えて<u>行動</u>する	
第3回		時間	15	- 優先順位を考えながら<u>時間</u>管理できるようにする - 何かしながら勉強はせずに、<u>時間</u>にメリハリをつけて<u>行動</u>する	
	1	自分	51	- 相手のことを思いやり、患者、同僚、先輩看護師など<u>自分の</u>周りの人たちを大切に <u>自分の</u>ことだけで精一杯にならず、周りも見えて視野を広げられるように人一倍努力していく - 勉強会や講演会に参加し、知識を深め、<u>自分の</u>ものにする <u>自分の</u>健康管理をきちんとし、体調を整え、周りに迷惑をかけない <u>自分の</u>意見を持ち、伝える	
	2	看護	40	- 常に自分の看護観を見つめ直し、初心を忘れず、向上心を持って過ごす - 本を読んだり、技術の練習をしたり、先輩看護師に質問したり、日々勉強、日々努力する - まずは病棟で看護師として一人前になる	
	3	患者	24	- 患者のために何かしたいという気持ちや感謝の気持ちを忘れない - 患者により看護を提供するために、まず自分の体調を管理していく - 患者の立場になって考える - 患者、スタッフとの関わりがどうであったか振り返り、次につなげる	
	4	人	22	- 周りの人、家族、友達、患者に常に感謝の心を持ち続ける <u>人</u>のアドバイスを素直に聞き、視野を広げたい <u>人</u>と比べて自分を卑下しない - 自分の目標にしているもの、<u>人</u>を見つける <u>人</u>の変化に気づける<u>人</u>になる	
	5	考える	19	- 失敗しても意味のあることと考える - 優先順位をつけてどのようにするのが一番いいのか<u>考える</u> - 普段から相手の立場に立って<u>考え</u>たり、共感したり、感謝することを大切にする <u>考えた</u>ことを声に出す	

は「自分」と「考える」であり、「自分」は両回とも最頻出語であった。「自分」に関わる記述内容は、第1回では「誰かがやってくれるだろうと思うのではなく、自分がやる、協力してやる」「自分の意見を少しでも表出できるようにしたい」等であった。第3回では「相手のことを思いやり、患者、同僚、先輩看護師など自分の周りの人たちを大切にする」「自分のことだけで精一杯にならず、周りも見て視野を広げられるように人一倍努力していく」等であった。

「考える」に関わる記述内容は、第1回では「自分のダメなところ、できていないところを隠さずに受け止め、どう改善したらよいか考える」「相手側の思いや立場になって考える、相手の言動の意味や意図を考えてみる」等であった。第3回では「失敗しても意味のあることと考える」「優先順位をつけてどのようにするのが一番いいのか考える」「普段から相手の立場に立って考えたり、

共感したり、感謝することを大切にする」等であった。

その他の語については、第1回では「勉強・意見・行動・時間」という自分の立場から働きかける主体的な語が用いられ、第3回では「看護・患者・人」という他者との関係を含んだ語が用いられていた。

2. 共起ネットワーク

1) 第1回「統合実習に向けた自己課題に対する具体的な行動」(図1)

共起ネットワークでは、「意見」と「理解」が最も中心性が高い抽出語であった。「意見」は、「自分」・「時間」・「持つ」の順で、「理解」は、「国家試験」・「模試」・「協力」の順で共起性が強かった。次に中心性が高い抽出語は「授業」であり、「積極」・「物事」の順で共起性が強かった。その次に中心性が高い抽出語は「患者」であり、「統合実習」

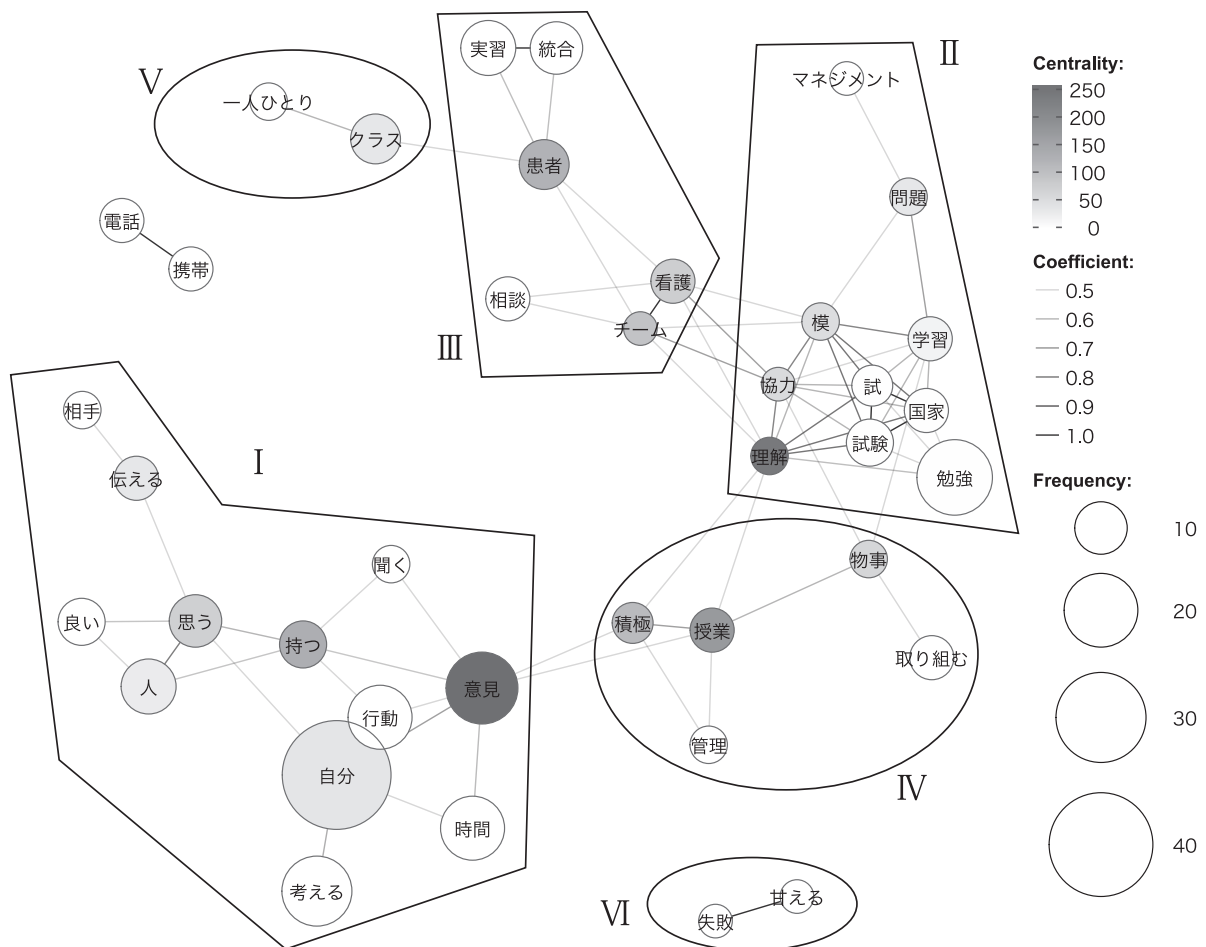


図1 共起ネットワーク (第1回)

との共起性が強かった。また、「携帯－電話」は共起性の強い抽出語として検出されたが、「携帯電話」を示すものでありカテゴリーから除外した。

その他に共起性の強い抽出語として、「失敗－甘える」、「看護－チーム－協力」、「人－思う－持つ」、「学習－問題－模試－国家試験－協力」、「自分－行動、考える」、「一人ひとり－クラス」が検出された。

これらの分析から、以下の6つのカテゴリーに分類された(表4)。

「人の意見をよく聞くことも大事だけど、まずしっかりと自分の意見を持つ」等の記述からなる【Ⅰ：自分の意見を持ち伝える】、「統合実習で受け持たせていただく患者やチームの患者の疾患や情報、師長や看護師の役割を理解しながら授業や国家試験の問題と結びつけながら学習を深めていく」等の記述からなる【Ⅱ：理解しながら協

力して国家試験の学習をする】、「チームの一員として患者のケアに参加できるように、チームや看護師、先生など様々な意見から物事を解決できるようにする」等の記述からなる【Ⅲ：実習ではチームの一員として患者のことを相談する】、「人任せにし、授業中など積極的に発言しないので、他の人がしてくれるだろうという気持ちではなく、自分がしようという気持ちで勇気を出し、積極的に発言する」等の記述からなる【Ⅳ：積極的に授業や物事に取り組む】、「クラスのメンバー一人ひとりが意識して助け合いながら、物事に対して取り組んでいく」等の記述からなる【Ⅴ：クラス一人ひとりが助け合う】、「失敗を恐れずに迷ったら動く、誰かがやってくれるは甘えである」等の記述からなる【Ⅵ：失敗を恐れず甘えることなく行動する】であった。

表4 個人ワークのカテゴリー化(第1回)

群	カテゴリー	共起した語	記述内容(抜粋)
I	自分の意見を持ち伝える	意見, 自分, 時間, 持つ, 聞く, 行動, 考える, 思う, 人, 良い, 伝える, 相手	・人の意見をよく聞くことも大事だけど、まずしっかりと自分の意見を持つ ・場の空気に流されず、他者の意見を聞いた上で自分の意見を伝える ・わからないならわからない、わかるなら意見を言うなど行動に移していく ・思ったことは伝える努力をする
II	理解しながら協力して国家試験の学習をする	理解, 国家試験, 模試, 協力, 勉強, 学習, 問題, マネジメント	・統合実習で受け持つ患者やチームの患者の疾患や情報、師長や看護師の役割を理解しながら授業や国家試験の問題と結びつけながら学習を深めていく ・国家試験まで残り少ないことを自覚し毎日勉強する ・授業内容も国家試験につながるため、授業を聞くのではなく、意見を言ったり、考えたことは秘めないようにするなど参加する
III	実習ではチームの一員として患者のことを相談する	統合, 実習, 患者, 看護, チーム, 相談	・チームの一員として患者のケアに参加できるように、チームや看護師、先生など様々な意見から物事を解決できるようにする ・統合実習では今までよりも看護師と積極的に連絡や相談をし、タイムマネジメントしていく
IV	積極的に授業や物事に取り組む	授業, 積極, 物事, 取り組む, 管理	・人任せにし、授業中など積極的に発言しないので、他の人がしてくれるだろうという気持ちではなく、自分がしようという気持ちで勇気を出し積極的に発言する ・諦めずに物事に取り組むために目標を決める
V	クラス一人ひとりが助け合う	クラス, 一人ひとり	・クラスのメンバー一人ひとりが意識して助け合いながら、物事に対して取り組んでいく ・クラスの一人ひとりが参加し苦手を補い合いながら助け合う
VI	失敗を恐れず甘えることなく行動する	甘える, 失敗	・失敗を恐れずに迷ったら動く ・誰かがやってくれるは甘えである ・今日ぐらいいいかと甘えたことを言わない

2) 第3回の「今後の自己課題に対する具体的な行動」(図2)

共起ネットワークでは、「患者」が最も中心性が高い抽出語であり、「看護」・「家族」・「自分」の順で共起性が強かった。次に中心性が高い抽出語は「持つ」・「忘れる」であった。「持つ」は「看護」・「技術」・「人」の順で、「忘れる」は「頑張る」・「患者」の順で共起性が強かった。その次に中心性が高い抽出語は「頑張る」・「聞く」であった。「頑張る」は「実習」・「失敗」の順で、「聞く」は「見る」・「人」の順で共起性が強かった。

その他に共起性の強い抽出語として、「ストレス－健康」,「信頼－充実－プライベート」,「人－聞く－見る－思い」,「技術－練習」,「素直－失敗」,「環境－慣れる」が検出された。

これらの分析から、以下の6つのカテゴリーに分類された(表5)。「常に患者や家族のことを考

え、寄り添える看護師になる」,「自分で勉強しながらも先輩看護師の技術や知識を盗み、自分のものにする」等の記述からなる【Ⅰ：常に患者や家族のことを考え、必要な知識を自分のものにする】、「新しい環境では自分から挨拶をしたり、自分から話しかけたり、わからないことはわからないままにせずに周りの人に聞いたりしていく」,「周りの人、家族、友達、患者に常に感謝の心を持ち続ける」等の記述からなる【Ⅱ：自ら周囲の人との関係性を持ち続ける】、「努力することを忘れず、失敗しても成功への糧だと思って粘り強く頑張りたい」,「今までの実習や国家試験で悔いが残った分しっかり学習し、4月から看護師として新たなスタートラインに立てるように頑張ろう」等の記述からなる【Ⅲ：失敗も含めて実習での経験をいかして頑張る】,「春休み中もしっかり学習と技術練習をする」,「自分が憧れる看護師を思い

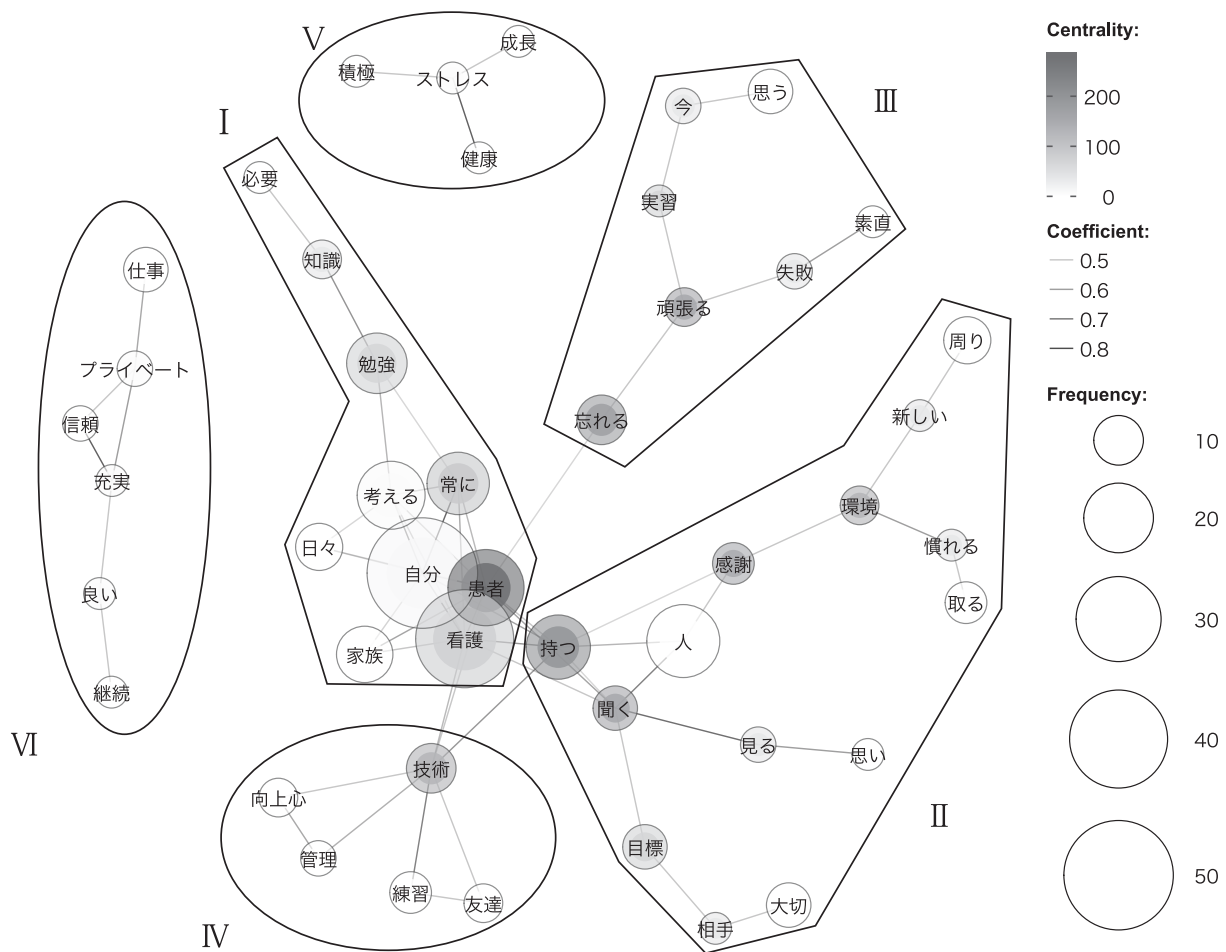


図2 共起ネットワーク (第3回)

浮かべてどうやったらその看護師みたいになれるのか、その看護師の技術を盗んだりしながら向上心を持って行動する」等の記述からなる【Ⅳ：向上心をもって友達と技術練習をする】、「仕事もプライベートも充実させる」等の記述からなる【Ⅴ：プライベートも充実させる】、「ストレス発散する」、「自分の健康管理をきちんとし、体調を整え、周りに迷惑をかけない」等の記述からなる【Ⅵ：ストレス管理と健康管理をする】であった。

考 察

1. 頻出語から見る学生の思考

第1回と第3回に共通していた頻出語は「自分」と「考える」であった。

第1回の「自分」では、誰かがやるのではなく自分がやる、自分の意見を少しでも表出したいなど、自分が行動すべきことに関心を寄せる文脈となっていた。「考える」では、自分のダメなところやできていないところを隠さずに受け止め、改善策や具体策を考えるなど、学生自身がありのままの自分を受け入れようとしていることが伺えた。行動変容（behavior change）は、「無関心期、関心期、準備期、実行期、維持期」の5つのステージを経て進行するとされている⁷⁾。「考える」とは現実から離れたところで自分の行動や感情を見つめる「もう一人の自分（他者性）」が機能することであり⁸⁾、ワールドカフェというリラックスした雰囲気の中で、カードづくりにより自分たちの良いところ・悪いところについて自由に語り合

表5 個人ワークのカテゴリー化（第3回）

群	カテゴリー	共起した語	記述内容（抜粋）
I	常に患者や家族のことを考え、必要な知識を自分のものにする	患者、看護、家族、自分、常に、考える、日々、勉強、知識、必要	・常に患者や家族のことを考え、寄り添える看護師になる ・自分で勉強しながらも先輩看護師の技術や知識を盗み、自分のものにする ・患者や先輩看護師などから常に学ぶ姿勢で働く ・常に向上心を持ちながら、研修や勉強会などに積極的に参加する
II	自ら周囲の人との関係性を維持続ける	持つ、人、聞く、見る、思い、目標、相手、大切、感謝、環境、慣れる、取る、新しい、周り	・新しい環境では自分から挨拶をしたり、自分から話しかけたり、わからないことはわからないままにせずに、周りの人に聞いたりしていく ・周りの人、家族、友達、患者に常に感謝の心を持ち続ける ・失敗しても落ち込まず、目標を持ち続けて勉強し続ける
III	失敗も含めて実習での経験をいかして頑張る	忘れる、頑張る、失敗、素直、実習、今、思う	・努力することを忘れず、失敗しても成功への糧だと思って粘り強く頑張りたい ・今までの実習や国家試験で悔いが残った分しっかり学習し、4月から看護師として新たなスタートラインに立てるように頑張ろう ・患者のために何かしたいという気持ちや感謝の気持ちを忘れずに、常にプラス思考で素直さを忘れない ・今思っていることを忘れずに常に初心に戻る
IV	向上心をもって友達と技術練習をする	技術、練習、友達、管理、向上心	・春休み中もしっかり学習と技術練習をする ・自分が憧れる看護師を思い浮かべて、どうやったらその看護師みたいになれるのかや、その看護師の技術を盗んだりしながら向上心を持って行動する ・人よりも不器用で緊張しやすいことを自覚し、日々技術練習に励む
V	プライベートも充実させる	信頼、充実、プライベート、仕事、良い、継続	・仕事もプライベートも充実させる ・週2日30分以上の運動を継続し、体力や精神力を向上させる
VI	ストレス管理と健康管理をする	ストレス、健康、成長、積極	・ストレス発散する ・自分の健康管理をきちんとし、体調を整え、周りに迷惑をかけない ・心の健康も重要なので人との交流も積極的に行い、助け合いができる関係をつくる

えたことが、自分について考える機会を生み、学生自身が問題の存在に気づくといった「関心期」のステージに向かわせたと考える。

第3回の「自分」では、自分の周りの人たちを大切にする、自分のことだけで精一杯にならないなど、他者や周囲に意識を向けつつ自分の行動に関する文脈へと変化していた。また「考える」では、失敗を意味のあることと考える、優先順位から最善を考えるなど、自分が置かれた状況を俯瞰して思考する文脈に変化していた。他者への関心は自己認識と自己受容が前提となる⁹⁾。第1回で自身の問題に気づくという「関心期」を経験した後に、第3回のカードづくりで、当面の目標や大事にしたいことをテーマとしたことが、学生が具体的な計画を立てるという行動変容の「準備期」に向かわせたと推察される。

2. 共起ネットワークから見る学生の思考

第1回では、遠慮して自分の考えや気持ちを表現できないこと、失敗を恐れて発言や行動を控えてしまうこと、計画的に行動できないこと、人に任せてしまう姿勢であること等が、自分が取り組むべき課題であると認識している。そのうえで、「意見を持つ、発言する、計画的に取り組む、主体性を持つ、行動する、助け合う」など、自らが行動するための方策を挙げることができている。第1回の共起ネットワークは6つのカテゴリーに分類され、【Ⅱ：理解しながら協力して国家試験の学習をする】、【Ⅲ：実習ではチームの一員として患者のことを相談する】、【Ⅳ：積極的に授業や物事に取り組む】では、卒業までに残された授業や統合実習、国家試験への取組に意識を向けた行動内容が挙がっていた。本報告で対象となった学生は青年期にあり、自己開示と他者の受入れを通して自我同一性を確立していく過程にある¹⁰⁾ことから、【Ⅰ：自分の意見を持ち伝える】、【Ⅵ：失敗を恐れず甘えることなく行動する】という、他者からの見られ方や評価を気にせず、ありのままの自分を表現することができたといえる。また、友人を信頼しているという、信頼や安定といった感情は、友人関係を確立するすべての欲求や活動の根底にある¹¹⁾。議論や問題解決を目指す話し

合いではなく、ワールドカフェという対話を繰り返すことで生まれる気づきや理解の深まりを共有した経験が、学生間の連帯感や信頼感を高め、自尊感情や他尊感情¹²⁾に作用した可能性があり、【Ⅴ：クラス一人ひとりが助け合う】につながったものと考ええる。

第3回では、患者や先輩看護師から見て聞いて熟練した技を学び取る、看護技術を習得する、学び続けるといった具体的な行動が挙げられたと共に、他者に自ら声をかける、質問するといった自ら周囲に働きかけることにも意識が向いており、これは社会人基礎力の「働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）」に該当する。さらに、新生活に向け、心身の健康に留意しながらプライベートも仕事も充実させたいとする前向きな内容が挙げられている。第3回の共起ネットワークは6つのカテゴリーに分類され、【Ⅰ：常に患者や家族のことを考え、必要な知識を自分のものにする】、【Ⅱ：自ら周囲の人との関係性を持ち続ける】は、卒業後に看護師として働く際の姿勢や心構えについて、他人事でなく主体的な表現として挙げられている。また、【Ⅲ：失敗も含めて実習での経験をいかして頑張る】、【Ⅳ：向上心をもって友達と技術練習をする】など、自らの統合実習での学習体験を踏んだ後に、ワールドカフェでの他者との交流により思考したことから、失敗も受けとめ、他人に働きかけるという目標表現となったものと考ええる。

3. “ワールドカフェ”実施時期の影響

臨地実習について池西ら¹³⁾は、看護師に求められる能力（知識、思考、行動）獲得に向けて、これほど効果的な学習の場はないと述べ、統合実習について安酸ら¹⁴⁾は、看護チームの一員としてよりリアルな看護実践の場に身を置き、自らの実践能力を評価し、課題を明確にする絶好の機会であると述べている。医学生を対象としたワールドカフェでも学生の知識や経験が増える高学年に向いていたことから、本報告でも最終学年である3年生を対象に統合実習前後に実施したが、共起ネットワークの結果からも、学生が課題を客観的に把握したうえで自己課題を意識して取り組む動

機づけとして効果的なタイミングであったと考える。

ワールドカフェの中で行われる会話は、「心をひとつにして行動できるようにするための会話」であり、ワールドカフェで生まれた知恵や発想、参加者の信頼関係が起点となり、それ以後の活動で、納得感のある実行計画が導き出される²³⁾。本報告では、ワールドカフェをホームルームの一環として実施したが、ワールドカフェが個とクラスの相互に一体感をもたらし、学習体験を整理することに繋がったものとする。

4. 研究の限界と課題

ワールドカフェに関するデータを分析することに同意した者は参加者の59.6%であったことから、元々主体性の高い学生のデータに傾いた可能性は否めない。また第3回の個人ワークの記述内容は、第1回のワールドカフェ以降に受講した授業や、プライベートの時間での経験が影響している可能性もある。しかし、これまで研究報告のなかった看護基礎教育でのワールドカフェの取り組みについて、同一集団の2時期（11月と2月）の比較から学生の思考の特徴を把握することができた。今後は、教育課程科目におけるアクティブラーニングの授業デザインを検討する際にワールドカフェを取り入れ、学習効果や課題を検証していくことが課題となる。

結 語

卒業を控えたA看護専門学校3年生の、主体的に課題を解決する力、内に秘めずに他人に働きかけ巻き込む力が高まる事を目指し、ホームルームを活用したワールドカフェを通して支援した。学生から提出された個人ワーク記載内容を分析した結果、他者との交流により考える機会が生まれたことにより、自己理解が高まった可能性があり、それは自分が取り組むべき具体的な目標を他人との関係性を踏まえて行動変容を目指そうとする文脈として表現されていた。ワールドカフェは、授業でのグループワークや実習カンファレンスと異なり、自由な雰囲気の中で結論を急がず、ゆった

りと意見を出し合うことで相互理解を深める運用方法であり、これにより学生の新たな発想や気づきが生まれたものと考えられ、本ワールドカフェのねらいは概ね達成できた。

謝 辞

本研究のテキストマイニングでのデータ集計や分析方法に関してご助言頂きました、奈良学園大学 上野栄一教授に厚く感謝いたします。また、本研究の趣旨を理解し、快く協力して頂いたA看護専門学校3年生の皆様にご心から感謝いたします。本研究の一部は、第49回日本看護学会看護教育学術集会にて発表した。

利益相反

申告すべきものはない。

著者資格

著者資格：S,SとN,Iは、研究の着想およびデザイン、教育プログラムの作成、データ収集と分析、原稿作成のプロセスに貢献した。H,WとE,Oは電子テキストデータの文章から語を切り出す「前処理の実行」以降のすべての分析、原稿作成のプロセス全体に貢献した。すべての著者は最終原稿を読み、承認した。

文 献

- 1) 箕浦とき子, 高橋恵: 看護職としての社会人基礎力の育て方 (第2版) 専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素. pp4, pp268, 日本看護協会出版会, 東京, 2018.
- 2) 香取一昭, 大川恒: ワールド・カフェをやろう! 会話がつながり、世界がつながる. 日本経済新聞出版社, 東京, 2009.
- 3) 浅田義和, 鈴木義彦, 長谷川剛ほか: 医学部学生に対するワールドカフェ授業の評価と今後の課題. 日本教育工学会論文誌 36: 33-36, 2012.

- 4) 宮本冬美, 玉田明子, 佐藤美紀子ほか:『看護学科と看護部との連携・協働による「がん看護実践者」育成プロジェクト』の取り組み – アンケート結果 –. 島根大学医学部紀要 39 : 59-66, 2017.
- 5) 堤明純, 石竹達也, 的場恒孝:小グループ学習における適切なグループ構成人数. 医学教育 31 (2) : 71-75, 2000.
- 6) 樋口耕一:社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版, 京都, 2017.
- 7) 佐藤栄子:事例を通してやさしく学ぶ中範囲理論入門 (第2版). pp443-252, 日総研, 愛知. 2011.
- 8) 新井英靖:学生の思考力を育てる授業づくり. IRYO 68 (2) : 82-85, 2014.
- 9) 溝川藍, 子安増生:他者理解と共感性の発達. 心理学評論 58 (3) : 360-371. 2015.
- 10) 近藤智恵, 吉良淳子:新卒看護師の職業的アイデンティティの変化-卒業前と就職後の関連についての縦断的検討-. 日本看護研究学会雑誌 47 (4) : 751-764, 2024.
- 11) 魚住郁子, 山田紀代美:青年期にある看護学生 of 自我同一性と仲間関係の検討. 日本看護学研究学会雑誌 37 (5) : 35-43, 2014.
- 12) 鑑幹八郎:アイデンティティとライフサイクル論. pp53, ナカニシヤ出版, 京都, 2002.
- 13) 池西静江, 石束佳子:看護教育へようこそ. pp177, 医学書院, 東京. 2015.
- 14) 矢野章永:看護学教育臨地実習指導者実践ガイド. pp155, 医歯薬出版株式会社, 東京. 2012.

The World Cafe Approach for Third-Year Nursing Students and Analysis by Text Mining

Satomi SHIRAI¹⁾, Noriko IWAMURA²⁾, Hiroko WASHIZUKA³⁾, Eri OKAMOTO³⁾

1) Former Toyama Prefectural University Faculty of Nursing Part-time teacher

2) Toyama Redcross Hospital

3) Toyama Prefectural University Faculty of Nursing

Abstract

This study provided support to third-year students at Nursing College A using the World Cafe approach in their homeroom, aiming to enhance the fundamental competencies for working persons, including their ability to take initiative, advocate, and execute tasks. Of the three sessions, two were conducted before and after the integrated training, whereas one was conducted after the national nursing examination. Text mining was employed to analyze the individual work reports submitted by 17 participants after each session. In the first session, the most common words were “self,” “opinion,” “think,” and “act.” The participants listed strategies for acting independently after recognizing personal challenges. In the third session, the most common words were “self,” “nursing,” “patient,” and “think.” The topics covered helped participants become more aware of their influence on others, including patients and senior nurses. The World Cafe’s informal setting allowed participants to exchange opinions without rushing to conclusions, fostering self-reflection through interaction. This may have enhanced self-understanding, particularly in setting specific goals and aiming for behavioral change.

Keywords

basic nursing education, fundamental competencies for working persons, educational programs, homeroom